9 月 19 日　いろんな「知」ップス

今日は朝の 8 時過ぎにバナナチップスの製造工程を見てきた。チップスは平日に作り、土日に収穫するらしい。月曜・土曜・日曜はバナナチップスではなくとろろ芋チップスを作るらしい。一日に 20 本のバナナを使ってチップスを作るらしく、一日に 1000 バーツ売れ、ネット販売もしているそうだ。揚げあがったバナナチップスは大きな袋にまず入れるのだが、それには 100~200 本のバナナが入っているそうだ。トムさんはバナナを寝かせてスライスし、バナナが無くなるぎりぎりまでスライス器を使う。手を切らないかとこちらはハラハラするのだが、トムさんは余裕でスライスしており、こちらと話をしながらでもスライスしている。(写真はバナナをスライスして鍋に入れているトムさん。)

トムさんからとろろ芋チップスの大袋をもらったので、いったん家に置くために持って帰った。その途中犬に追いかけられ、持論の「吠え声と目線を無視したら大丈夫」論（9 月 18 日の日記参照）が破たんした（笑)。無視しようが来る犬は来るんだなあ。なんともかしましい！

センターに帰ると、小学校の存在が気になりピー・ヴィローに小学校が有るのか聞いてみると、すぐそこにあると言うので行くことになった。本当にすぐそこだった（笑)。500m も行かないところにあった。小学校は小さくも、おおきなグランドが有って、グランドにはサッカーゴールもついていた。小学校は全校生徒は 63 人で、日本と同じで 1 年生から 6 年生が小学生なのだが、このバンジャムルンの小学校では小学校に上がる前の 5 才・6 才の子も別枠で受け入れていた。なのでクラスは全部で 8 クラスある。にもかかわらず、教える先生が 4 人しかいないので、テレビ（ビデオ）が先生の代わりをすることもしばしばだそうだ。学校の中を見学させてもらい、生徒にも英語とタイ語で自己紹介させてもらった。恥ずかしがり屋の子が多かったが、帰るときには元気にバイバイと手を振ってくれた。昔の足で踏むタイプのミシンが教室に有ったのが驚きだった。ヴィローさんもここに通って

いたというのも驚きだった。というのも、この小学校は見た目は塗装のせいもあってか結構新し目に見えたからだ。ところどころ穴の開いた床板にこの小学校の歴史を想像した。この日はだれかの誕生日だったらしく、みんなで「ハッピーバースデー」を歌っていた。タイのミックスカルチャーを思わせる。誕生日にはみんなにアイスクリームが配られるらしく、みんな騒いでいた。小学校には小さいけれど図書館もあり、日本の漫画のタイ語版や聖書の失楽園からイエスの死と復活までを簡単な概略を挿絵と共に記した本が有り、意外とバラエティは有るなあと思った。僕にとってその聖書の本は目新しかったのだが、キリスト教系の幼稚園に通っていた井上と浅山にとってはそんなに珍しくなかったらしく、ぼくがヴィローさんに「このような本は日本にはないと思う」と言うと、浅山さんに「ありますよ！」と注意されてしまった。反省。

センターに帰って一休みしていると、後ろからミンという高校生の子が話しかけてきた。高校生はもう夏休みに入っているのでセンターの手伝いに来ているのだそうだ。ミンさんとセンターのおじさんが親しげに話していたので家族なのかと思ったら、全然そういう関係はないという。コミュニティセンターにいる人々は往々にして互いの親密度が高い。一緒に仕事をしていなくても普通に話してお茶やカフェーを飲んでいる。小学校に行く途中にはお寺が有り、そこに車がたくさんあったのを思い出し、ミンさんに「今日はブッディスト・ホーリー・デイなのか」と聞くと、「なんですかそれは？」と言われたので「カレンダーにある仏陀のサインの日」と言うとわかってもらえた。「ブッディスト・ホーリー・デイ」はタイ語では「ワン・プラッ」と言うらしい。「ワン」が「日」で「プラッ」が「僧侶」だそうだ。そして今日はその「ワン・プラッ」で有ることがわかり、寺に行くことになった。しかし寺に行くともう参拝者はいなくなっており、尼さん（タイ語でメーシー）が僧侶の住居であるクゥティでお昼寝をしており、「今は長居するべきじゃない」とミンさんに諭された。クウティはあまり見学できなかったので、本堂を見ることにした。がしかし、本堂というのは実はプンさんのお家の裏に有ったお寺のことだった。クウティから本堂に向かう途中に「サン・プラ・プーム」（9 月 14 日の日記参照）らしいものが有ったので、撮ってもいいかミンさんに聞いてみるとダメだという。センターに帰ってダメの理由を話してくれた。サン・プラ・プームにお祈りしている人がいるから撮ってはいけないらしい。

だが、これまでも僕はサン・プラ・プームを撮ってきているし、だれも注意することはなかったし、許可を求めたときも OK と言う人が多かった。おそらくサン・プラ・プームに対する統一的な考えは「タイ人」全員に共有されているわけではないのだろう。
（写真はお坊さんが普段住む所。本堂とは別なのだが、「ワン・プラッ」になると人々がお布施にやってくる。）

ミンさんとは教育の話などもした。ミンさんは僕らがどのような制度でバンジャムルンに来たのかを聞いてきた。僕らがある程度の成績が有って、英語の一定の水準の資格を持っていて、いくらかレクチャーを受けることでこの留学に来れていると答えた。すると、ミンさんは「大学の先生は成績ばかり見る。だから都会のお金持ちで塾に通える学生はお金を使わずにこうゆう研修に行ったりしてチャンスが広がるが、都会の塾に通う学生より良い成績をとれない田舎出の学生は海外に行ったりしたい場合は奨学金の出る制度に漏れてしまいチャンスが広がらない。Better な経験を持つことができる。」と答えた。それに対して僕は「でも better というのは一つじゃないと思う。都会っ子にはできない経験をあなたはしているんじゃないか？この村での暮らしとか、今日みたいにコミュニティセンターの手伝いをするのとかを都会っ子はあまり持っていないんじゃないか？」と返した。そこでミンさんは「たしかにそう。それはわかる。大学生の“あたまのいい”人の考えはたしかに頭がいいが、現場でどのようにしたらよいのかが分かっていない。あたまのいい人の考えはあくまで考えであってリアルではない。だから、勉強も大事だけど、リアルで動いている大人の（＝経験者の）話をよく聞くことが大事だと思う。だからあなたたちもタイ語を勉強してフアイ・チャチャイやローン・チャイの話を聞いた方がいいと思う(^v^)b」と言っていた。ミンさんが一つの“better”に執着して、ミンさんの持つ good を認識してい

ないのかなあと誤解していた僕は、納得してそれに賛同した。でもタイ語が聞けない・話せないなので「リアル」に行動できない・・・。

また、ミンさんが「いなかの子どもは都会のこどもに学力では負けてしまう」と言っていたことと、バンジャムルンの小学校の「テレビティーチャー」がリンクし、「いなかでもがんばりゃ都会に学力で劣らない！」みたいな意見は現実を見ていないことになるのかなと思った。先生の質の問題以前に先生自体がいないのだから。タイの小・中学校は国の運営なのか、地方自治体の運営なのか気になった。

ミンさんが帰って、僕は洗濯物を干しに帰ったものの洗濯機が空いていなくて使えなかった。雨がやむのを待ちセンターに帰ると、「もう家に帰る」と井上・浅山。家に引き返し夕飯を食べてネットとメールチェックをするためセンターに行く。センターでいつもテレビを見ている青年が蚊よけスプレーをかしてくれた。ありがたい。本当に蚊が来なかった。タイのスプレーはすごい！彼はほぼ毎日センターでテレビを見ている。これほどまでに彼がリラックスしていてアットホームなのは、このセンターがバンジャムルンの人々にとって「ホーム」であることの表れなのかなあ。「リラックスしに来い！」の言葉がよぎる。